

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00168

研究課題名(和文) 仏身と表象 日本宗教美術史の基層の探究

研究課題名(英文) The body of Buddha and Representation - Investigating the Foundation of Japanese Religious Art History

研究代表者

長岡 龍作 (Nagaoka, Ryusaku)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：70189108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、平安時代から鎌倉時代初期にかけての宗教美術において、「仏身論」を構成原理とする表象がどのように表現されているかを具体的に解析することを目的とする。そのために、伽藍・堂宇、仏教造像、神表現の三項目において調査・分析をおこなった。その結果、(a)東大寺大仏の造立と仏身論の成立、(b)法身としての舍利、(c)清涼寺釈迦如来像に見る仏身論、(d)平安時代京都の伽藍と仏身論、(e)北宋開封の伽藍と仏身論と盧舎那仏の像容、(f)遼の舍利塔と仏身論、(g)受戒における仏像の役割 盧舎那仏の化身の釈迦という観点を踏まえて、(h)再興東大寺大仏の仏身論の各点において新たな知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、東大寺大仏が生んだ世界観と平安以降の宗教世界との影響関係を問う観点はなく、盧舎那仏の化身の釈迦如来を受戒との関わりから評価する研究もない。清涼寺釈迦如来像を大仏と関係づける着眼はかつて塚本善隆氏が示したものの、その後取り上げられることはなく、梅檀釈迦瑞像が北宋開封において『梵網経』の仏身論に基づいていたことに着目した研究はない。空海以降の仏像の納入品が密教化することを法身の形象化と見る研究もない。近年日本彫刻史では、仏像を生身仏と関連付ける傾向が強いが、「仏身論」については十分な関心が払われていない。顕密融合の「仏身論」というという枠組みの提示は、従来の彫刻史を大きく見直す契機になる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to analyze how representations based on the Buddha-kaya theory were expressed in religious art. To this end, I conducted research and analysis in three areas: 1) temple complex and temple buildings, 2) Buddhist statues, 3) representations of gods. As a result, I was able to gain new insights into (a) the construction of the Great Buddha of Todaiji Temple and the establishment of the Buddha-kaya theory, (b) sarira as dharmakaya, (c) the Buddha-kaya theory in the Shaka Nyorai statue at Seiryōji Temple, (d) temple buildings in Kyoto during the Heian period and the Buddha-kaya theory, (e) temple buildings in Kaifeng, Northern Song Dynasty, the Buddha-kaya theory, and the appearance of the statue of Vairocana, (f) stupas in the Liao Dynasty and the Buddha-kaya theory, (g) the role of Buddhist statues in receiving ordination - based on the perspective of Shaka as an incarnation of Vairocana, (h) the Buddha-kaya theory of the restored Great Buddha of Todaiji Temple.

研究分野：東洋日本美術史

キーワード：東大寺大仏 清涼寺釈迦如来像 裔然 生身仏 五輪塔 法身舍利 梵網経 大相国寺

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、研究代表者は、『華嚴経』に基づく「天界」という思想に新たに着目するとともに、他界としての「天界」表象の位相を明らかにした(長岡龍作「奈良時代東大寺における「天」の意義と造形」『東大寺の新研究3 東大寺の思想と文化』2018年)。この研究は、『華嚴経』に基づく蓮華蔵世界を前提としている。聖武天皇により東大寺大仏が造立された時、日本では『華嚴経』及び『梵網経』に基づく仏教的世界観が明確なかたちをとった。大仏は台座の蓮弁に世界図を線刻し、壮大な世界観を視覚化する。『梵網経』は「盧舎那仏の坐る蓮花台をめぐる千花にはそれぞれ百億国がある。釈迦はおのこの国の菩提樹に坐り一時に仏道を成ず。盧舎那仏を本身とするこの千百億の釈迦は、各世界の道場で盧舎那仏の戒である「十重四十八輕戒」を誦す」と説くことから、台座蓮弁には釈迦が表された。聖武天皇による大仏の造立によって、本身盧舎那仏 化身釈迦如来という仏身論が成立した。

平安時代の正暦五年(994)、関白藤原道隆が建立した積善寺には金色丈六毘盧舎那仏像が図絵の釈迦一万体とともに安置された(『扶桑略記』)。平安時代に継承された蓮華蔵世界を示すこの例に続き、治安二年(1022)に藤原道長が建立した法成寺金堂の中尊は「毘盧舎那如来」とも「大日如来」とも呼ばれ、その台座蓮弁には百体釈迦があった(「法成寺金堂供養願文」)。法成寺金堂中尊の重要性は、蓮華蔵世界の教主毘盧舎那如来と密教の大日如来の二つの性格を併せ持つ点にある。ここには、顕密を融合した仏身論が認められる。同様に、顕密をともに含む多様な尊像が集積する平泉の中尊寺も、顕密を融合した「仏身論」を原理として造営された寺院である。

2. 研究の目的

以上のような問題意識から、本研究は、特に平安時代中期から中世にかけての宗教美術において、「仏身論」を構成原理とする表象がどのように表現されているかを具体的に解析することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の関心は以下の各点にある。

- ・伽藍内に配される堂宇の性格と関係
- ・堂宇内に配置される尊像の種類と組み合わせ
- ・尊像自体に具わる【法身 - 化身・生身】の原理
- ・生身とされた仏教尊の意味と表現
- ・生身とされた神の意味と表現

この関心に沿いながら、伽藍・堂宇、仏教造像、神表現の各表象を対象として事例調査及び分析をおこなう。

4. 研究成果

当初の計画通り「仏身論」がいかに表象されているかについて、伽藍・堂宇、仏教造像、神表現の三項目において調査・分析をおこない、以下の諸点をあきらかにした。

(1) 東大寺大仏の造立と仏身論の成立

東大寺大仏が建立され、『華嚴経』・『梵網経』に基づく仏身論が成立した。大仏は台座の蓮弁に世界図を線刻し、壮大な世界観を視覚化する。日本において最初に法身仏として具現化された東大寺大仏は、平安時代初期の空海による真言院建立以降、密教的意味を重ね、顕密を融合した法身仏と見なされるに至る。

(2) 法身としての舍利

中国六朝には、仏身には生身(化身)と法身の二種があり、法身こそが究極の仏であるとの理解が定着した。空海将来の舍利八十粒は、後七日御修法に際して金銅宝塔に納められることにより、法身大日に見立てられ修法の本尊となった。中世日本では、法身は密教化し、五輪塔と仏舍利がそれを表象するようになる。

(3) 清涼寺釈迦如来像に見る仏身論

北宋雍熙二年(985)の清涼寺釈迦如来像は、施主である東大寺僧裔然の仏身論を反映し、舍利である五臓が顯密融合の法身に見立てられ、それを蔵することで仏像は生身仏という意味を獲得した。法身舎利の納入が仏像を生身化するという二身論に基づく仕組みがこれにより成立した。清涼寺釈迦如来像の仏身論は、『梵網経』・『華嚴経』に基づきつつ、顯密を融合させるという点に特色がある。

(4) 平安時代京都の伽藍と仏身論

法成寺は藤原道長の東大寺での受戒を契機に東大寺に倣い造られた。それにより法成寺金堂本尊は大仏同様、顯密融合の法身仏とされ、各堂宇はこの像を基点とした仏身論の枠組みによって意味づけられた。以後この原理は法勝寺・中尊寺にも継承された。

(5) 北宋開封の伽藍と仏身論と盧舎那仏の像容

・北宋開封の啓聖禅院と大相国寺の伽藍には、いずれも「千百億釈迦」が存在した。これはこの伽藍に『梵網経』に基づく、盧舎那仏とその化身の釈迦という仏身論が適用されていることを示す。また、大相国寺には『華嚴経』に基づく仏身論により、盧舎那仏と眷属を伴う文殊・普賢像が安置された。この眷属中には、善財童子が含まれていた可能性が高い。北宋王朝の枢要寺院である啓聖禅院と大相国寺に出現した仏像と伽藍の構成原理は、大きな影響力を持ったと想定される。

・啓聖禅院と大相国寺の盧舎那仏の像容は共通し、大きな影響力を持ったと想定される。そのため、両寺の盧舎那仏の像容を復元するべく考究した。その際に注目したのは、両手を左右に拡げて構え掌を上に向ける印相(新印相)である。杭州飛來峰の盧舎那仏(乾興元年・1022)の印相として従来から注目され、鎌倉時代日本でも受容されたことが知られる。山西省長治博物館所蔵の盧舎那仏像は、頭上に五体の坐化仏を戴き、新印相を執る。また、台座の千枚の蓮弁それぞれに仏坐像を配している。『梵網経』に基づく新印相の盧舎那仏として同像の重要性は高い。

(6) 遼の舍利塔と仏身論

朝陽北塔天宮発見の木胎銀棺には、法身仏として大日如来が表現されている。法身・報身・化身という中国華嚴の三身思想が遼仏教に及んだ時、大日如来が法身仏として造形化されるに至ったことが想定される。顯密融合の仏身論がここには認められる。さらに朝陽北塔では、仏舎利を大日如来に見立てていることが確認される。これは、清涼寺釈迦如来像像内の五臓が大日如来に見立てられたことと共通する。

(7) 受戒における仏像の役割 盧舎那仏の化身の釈迦という観点を踏まえて

東大寺大仏が依拠する『梵網経』は、大乘菩薩戒を支える根本經典のひとつである。『梵網経』は釈迦如来を、盧舎那仏の化身であり菩薩戒を説く者であるという二面において意味づけている。それゆえ、大仏造立以降、日本においては、受戒と関わる釈迦如来像は、大仏との関わりを有することになる。その観点から、東大寺戒壇院、清涼寺、法成寺、西大寺の釈迦如来像を検討すると、いずれもが何らかの形で東大寺大仏との関係を有していることが明らかとなる。また『梵網経』は、受戒の前提となる好相行と仏像の関係を明確に説いてい

る。好相行が求めるのは滅罪である。薬師如来は持戒と破戒からの回復をもたらす尊であるため、日本では好相行の本尊として特に薬師如来像が選ばれることになった。鑑真の唐招提寺、善珠の秋篠寺、最澄の比叡山一乗止観院の薬師如来像が、好相行のための仏像として機能したと見なされる。

(8) 再興東大寺大仏の仏身論

・法身である舍利を納入することで仏像は生身仏に变じ、仏身論的に意味を完結する。再興東大寺大仏は、五輪塔に納められることで法身となった舍利が納入された結果生身仏となった。五輪塔に舍利を納める所作は顯密融合の法身を生む仕組みである。文治元年（1185）に、再興大仏で初めて試みられたこの作法は東国へ移植された。施主の依頼に応え運慶は、願成就院の諸像、樺崎寺伝来の二体の大日如来像を造った。願成就院像は五輪塔が納入されることで生身仏に变じ、樺崎寺像は、五輪塔と月輪という金胎両部の二種の法身が納入され、厨子とともに意味を発現した。

・再興東大寺大仏は生身仏となった結果、応身釈迦と団体視されるに至り、大仏殿で催された顕教法会（最勝講經）の主尊となった。一方、並行して大仏殿で修された密教修法（両部大法）は大仏胎内の法身である五輪塔内の舍利八十粒を本尊とした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 66
2. 論文標題 清涼寺釈迦如来像と東大寺大仏	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 浅草寺仏教文化講座	6. 最初と最後の頁 42-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 29
2. 論文標題 仏の感応と仏像 法身の表象をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾大学アートセンターブックレット	6. 最初と最後の頁 12-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 なし
2. 論文標題 序章 平泉美術の概要と研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『平泉の文化史3 中尊寺の仏教美術』	6. 最初と最後の頁 1-20頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 なし
2. 論文標題 草創期中尊寺伽藍の構想と信仰	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『平泉の文化史3 中尊寺の仏教美術』	6. 最初と最後の頁 21-46頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 なし
2. 論文標題 清凉寺釈迦如来像の胎内に見る信仰世界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『アジア仏教美術論集 東アジア (五代・北宋・遼・西夏)』	6. 最初と最後の頁 145-184頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 33
2. 論文標題 仏像のアーケオロジー 仏像から「文化の痕跡」を読み取る	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊考古学別冊	6. 最初と最後の頁 11-18頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 なし
2. 論文標題 渤海の仏像と東アジアの仏教信仰 二仏並座と兜率天往生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『科学研究費補助金基盤研究(B)「弥勒造像史における「間?世界性」表現の系譜」研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 143-156頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 なし
2. 論文標題 清凉寺「版画弥勒菩薩像」と奄然の弥勒信仰	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『科学研究費補助金基盤研究(B)「弥勒造像史における「間?世界性」表現の系譜」研究成果報告書』	6. 最初と最後の頁 133-141頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 0
2. 論文標題 悠久の創造の物語 美術が伝える大乘仏教の世界	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『悠久の絆 奈良・東北のみほとけ展』図録	6. 最初と最後の頁 22-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 0
2. 論文標題 盧舎那仏と栴檀釈迦瑞像 北宋・遼と日本の仏身論をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『東アジアの王宮・王都と仏教』	6. 最初と最後の頁 360-405
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 0
2. 論文標題 見えないものを見せる 宗教美術における風のイメージ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『風のイメージ世界』	6. 最初と最後の頁 43-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 0
2. 論文標題 仁寿舍利塔の思想と舍利容器	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『器と信仰 東アジアの舍利荘嚴をめぐる美術史・考古学からのアプローチ』	6. 最初と最後の頁 129-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 0
2. 論文標題 法身としての舍利と容れ物 仁寿舍利塔から大仏へ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『器と信仰 東アジアの舍利荘嚴をめぐる美術史・考古学からのアプローチ』	6. 最初と最後の頁 229-263
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 草創期中尊寺の伽藍と平安時代の仏教思想
3. 学会等名 GPJS研修（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 仏教美術におけるビーズと荘嚴
3. 学会等名 特別セミナー「ビーズに込められたメッセージ - 人と仏をかざる -」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 日本の美術史研究の歴史と現在
3. 学会等名 廣州大學美術與設計學院講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 美術に見る奈良仏教の世界
3. 学会等名 東北東芝グループ会講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 盧舎那如来と栴檀积迦瑞像 日本と北宋の仏身論をめぐって
3. 学会等名 宮と都の東アジア比較宗教シンポジウム 日本・宋・高麗・契丹（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 自然景を媒介した彼岸と此岸の表象・自然的要素が組み込まれた寺院の造形空間
3. 学会等名 平泉の仏教的理想空間に係る国際研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 仏像のいいお顔
3. 学会等名 日本顔学会第46回顔学オンラインサロン（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 新宮寺文珠五尊像と日本の文殊信仰
3. 学会等名 研究報告会「名取新宮寺一切経『続高僧伝』と玄奘三蔵の伝記」
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 長岡龍作（野村俊一編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 304
3. 書名 空間史学叢書 4 聖と俗の界面	

1. 著者名 長岡龍作	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 462
3. 書名 仏教と造形 信仰から考える美術史	

1. 著者名 長岡龍作（板倉聖哲・塚本麿充編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 500
3. 書名 コレクションとアーカイヴ 東アジア美術研究の可能性	

1. 著者名 長岡龍作・浅井和春共編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 182
3. 書名 平泉の文化史3 中尊寺の仏教美術	

1. 著者名 長岡龍作監修	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 739
3. 書名 神像彫刻重要資料集成1 東日本編	

1. 著者名 長岡龍作監修	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東北放送株式会社	5. 総ページ数 203
3. 書名 『悠久の絆 奈良・東北のみほとけ展』図録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------